

日本のゴルフ場における環境問題と持続可能性に関する研究
A study on environmental problems and sustainability of golf course in Japan

1K06B018-1

井澤 実

指導教員 主査 友添秀則 先生

副査 木村和彦 先生

【本研究の動機】

我々人類は科学技術の発展により様々な恩恵を得ることができるようになった。しかしそれに伴う自然環境の見境ない破壊活動も同時に行われるようになり、いま地球規模の環境悪化が危惧されている。環境破壊が今後も続くようであれば地球から多くの自然が失われることとなり、ときには再生不可能な場合もある。我々はかけがえのない自然を未来へ残す方法を考えなければならないのであり、これはスポーツにおいても例外ではない。

スポーツは文化的発展と科学技術の発展により、その環境もより質の高いものが求められるようになってきた。その中でとりわけ厳密な管理が要求されるのがゴルフ場である。昔から自然の中で行われていたゴルフというスポーツは、今日では精密に整えられた芝のうえで行われるのが一般的である。この芝の管理には膨大な量の殺虫剤や化学肥料が使用され、潜在的な生物の消失、生態系の変化は免れない。もちろん自然の山や森の中に大きく陣取るいくつものコースを造成するためにも多くの自然に手を加えなくてはならない。自然は人間にとってかけがえのない資源である。しかし同時にゴルフもスポーツとして成立しているひとつの文化である。どちらかを選ぶという二極説ではなく、これらを共存させる方法が求められるのである。共存の方法を持続可能性という観点から検討し、スポーツ施設のあり方を提言することが本研究の目的である。

【研究の方法】

本研究は文献研究によって行う。

【各章の概要】

第1章 ゴルフの歴史と変遷

ゴルフの起源には諸説あるが、いま我々が親しんでいる「ゴルフ」というスポーツを現在のかたちまで発展させたのはスコットランドだといわれている。

日本初のゴルフ場は1903年イギリス人の貿易商アーサー・ヘスケス・グルームらによって兵庫県の六甲山中に造られた「神戸ゴルフ倶楽部」である。その後日本の各地でゴルフ場が造られるようになるが、戦後になってその勢いが加速し、その数は世界2位の多さにまで到達する。しかしその理由としては山間地の過疎化とそれにつけ込む利益目的のリゾート開発が背景にあり、必ずしも競技者の需要に沿ったものだったとはいえない。

第2章 ゴルフ場と環境問題

スポーツは近代化とともにその行われる場を自然の中から人工的に造られたものへと移行させていった。自然から離れていくことはスポーツという文化の発展の一過程と考え、悲観されるべきではないが、その結果自然環境を無碍にするような活動へと変わったことも事実である。ゴルフ場に関していえば、開発に関連する問題として山林地等の大規模な開発による自然破壊、それに伴う生態系の変化、美しい景観の消失などがあり、運営に関連する問題として農薬などによる大気や水質の汚染とそれに伴う周辺の住民の健康被害や生態系の変化、騒音・振動等の生活環境の質の悪化などがある。

第3章 持続可能性の研究

1982年国連の「環境と開発に関する世界委員会」において「持続可能な開発」という概念が提唱された。これは「将来の世代の欲求を充たしつつ、現在の世代の欲求も満足させられるような開発」などと定義されているが、実際多くの曖昧さを含む概念であったため様々な方面から批判を受けることになる。本論文内ではこの概念をもとに、スポーツに関連した分野に範囲を限定し、「持続可能性」という概念を提唱する。またこの概念を「現在及び将来の世代の人間が、自然環境と社会環境を尊重しながらスポーツ文化の恩恵をも受けることのできるようなありかた」と定義する。

第4章 ゴルフ場の持続可能性による考察

スポーツにおいて持続可能性という概念は定着しにくく、また実践もされにくい面を持っている。しかし他の産業と同様スポーツも環境保全に取り組む社会的責務を有している。そのためゴルフ場が持続可能性を実現する先駆的モデルとしてスポーツと自然の共生を体現すべきだと考える。

その方法として、開発は最大限潜在的な自然を残す、または再現することで周辺の自然環境との連続性を持たせ、環境の変化を最小限に止める。運営は人体及び動植物への毒性や周辺環境への影響を考慮し、自然的な管理方法とその体制の確立を図ること等が考えられる。しかしそのためにはスポーツの持つ持続可能なものへの移行に対する無関心かつ不寛容な性質を乗り越える必要がある。

結章 まとめ

第1章から第4章までを総括し、今後の課題を提言する。